

米国The SWA Groupのインターンシップ・プログラム

The SWA Group Summer Internship Program

柴田 久

福岡大学工学部 准教授 / カリフォルニア大学バークレイ校 客員研究員

ランドスケープ・アーキテクチャを中心に世界各国で実績をもつThe SWA Group(以降SWA)は、1957年、佐々木秀雄とPeter Walkerによって設立された。両氏はハーバード大学での教鞭経験もあり、ここで紹介するインターンシップ・プログラムは、本年度までに約30年間続くものである。毎年行われる本プログラムには世界中の学生から応募があり、2010年度においては125名から6名が選抜される狭き門となった。プログラムの期間は約8週間、初めの4週を事務所内(本年度はCalifornia州Sausalito)のデザイン・スタジオ、残りの4週を各自配属された米国内の事務所で過ごす。デザイン・スタジオではSWAが関わりを持つ町や敷地の計画・設計プロジェクトを課題として設定している。本年度はSan Franciscoから北東40kmほどのところにあるVallejoという町の中心街ならびに隣接する臨海部の活性化プランの提案であった。ワインで有名なNapa Valleyへの通り道となるVallejoはSan Pablo Bayに繋がる特徴的な瀬戸に隣接し、100年以上続いた造船所を持つ古くからの港町である。しかし、1996年に造船所が閉鎖されたことで街は一気に衰退し、2008年にはカリフォルニア州で破綻した最も大きな町となってしまった。船を修理するドックなどは今も残され、街には少ないながら歴史的建造物も現存している。学生達はSWAのスタッフとともに現地踏査、地元関係者とのディスカッション、有識者からのレクチャーを受け、グループ作業と最終的には学生個人で提案内容を図面化し、発表する。またスタジオでは第1週目に「Urban/Regional Planning」、2週目に「Urban Design/Open Space」、3週目に「Down Town」、4週目に「Waterfront Design」と週ごとにテーマが設定され、課題対象地について、より広範な視点から具体的なデザイン案へ、徐々に焦点を絞っていく構成が取られている。学生の指導には「プリンシパル」と呼ばれるチーフ・デザイナーを中心に、担当スタッフが決められており、各週末には中間発表、また第4週目には最終発表会が設定されている。プリンシパルは学生と同じテーブルを囲みながら、調査や作業のポイント、プレゼン方法等について、かなり具体的な指導を行っていた。最終発表会ではSWAのみならず他事務所のデザイナーを含め、地元コミュニティや自治体など多くのゲストが招かれ、学生の提案に対して丁寧に批評やアドバイスが行われていく。学生の提案に対して厳しいコメントも飛び交う中、Vallejoの将来について真剣に議論する発表会の雰囲気

はとても印象的であった。期間中はほぼ毎昼食時に、これまでSWAが行ってきたプロジェクトの紹介と質疑応答の時間も設けられている。学生たちは事業経緯やコンセプト立案、計画・設計の手法等、各国で活躍するデザイナーから実務に関わる生の声を聞き、大学の授業ではなかなか出てこない現場や都市、社会の実情を学ぶことになる。

本プログラムを総括するSWAプリンシパルのElizabeth Shreeve氏にインターンシップについて尋ねたところ、彼女は以下のような話をしてくれた。「インターンシップの重要な点は学生側と企業側の二つの見方で異なる。学生にとっては、オフィスで働きながら実際のプロジェクトや実務に携わるデザイナーから直接知識やアイデアを学べる機会があること。企業にとっては、教育的なプログラムを通して学生をよく観察し、優秀な若手人材を自分たちの会社に引き抜ける利点がある」。

我が国においてもインターンシップの重要性は認知されており、学生の学外実習の場としてプログラム化されている大学も多い。しかし、学生に対する実践的な教育と企業側の人材発掘の場としてインターンシップが十分に活用されているかどうかは若干疑問も残る。景気低迷で苦しい財政下にある昨今、時間やお金をかけたインターンシップの実施が難しいことは周知のとおりであろう。しかし、そのような時だからこそ、こうした手間暇かけた学生と企業との密なやりとりが、時代を変えてくれる人材の育成に繋がる糸口となるのかもしれない。



現地踏査の様子



プリンシパルを囲んでのグループ・ディスカッションの様子